

教職課程履修学生の意識を探る

宇 佐 見 忠 雄

1. はじめに

本稿は、日頃から講義や演習、実習等の授業で接している教職課程履修学生が、「教職」に対してどのような意識や考えを抱いているかを、資料に基づいて探究しようとするものである。すなわち、①履修学生たちは、どのような動機や理由から教職課程を履修しようと思ったか、また、②学生たちは現在、履修中の教職課程の授業からいろいろなことを感じているであろうが、それらのうち自分にとって役に立ったり良かったと思う点は何であろうか、逆に、③履修していて学生たちが苦勞していることや立ちほだかる障壁と感じている点は何か、最後に、④学生たちは、教員免許取得後の将来設計を現段階でどのように思い描いているか、以上の4点から探究し考察を加えることで、教職課程履修学生の意識や心理、本音や考えなどを可能な限り把握することにしたい。かくして、より適切な学生指導に資することができるようになると確信する。

というのも、授業担当者として長年教壇に立って学生に接していると、ややもすると「慣れ」や「思い込み」で、すなわち「惰性」で学生に向き合いがちになってしまい、こうしたことでは学生に有効な働きかけをすることは難しい、と最近感じるようになってきているからである。つまるところ、憶測や思い込みで学生のあり様を判断することは、厳に慎むべきであって、ここに目の前にいる学生たちの意識や本音を探究する意義もあろう。

さて、調査の概要としては以下のようである。

- * 調査資料：2年生「教育原理」の受講学生に、「教職課程と私」というテーマで思うままにレポートを作成してもらった。分量としてはパソコンで打ち込んだA4の用紙1～2枚程度である。
- * 調査の時期：平成24（2012）年度後期の9月下旬にレポート課題を提示し、1ヶ月後の10月下旬にレポートを回収。
- * レポートを提出した学生の人数と内訳：本学の国文学科学生39名、英文学科学生28名、

美学美術史学科学生18名、管理栄養士専攻学生9名、人間社会学科学生7名、現代社会学科学生13名、以上計114名の履修学生で、ほとんどが大学2年生。

2. 教職課程履修の動機や理由

それでは最初に、卒業単位でもないオプションの教職課程を、学生たちが履修しようと思ったり、現在履修している動機や理由は何であろうか。手始めにこの点から探ってみよう。

(1) 学校時代の恩師の影響

まず多かったのが、小・中・高校のいずれかの時代に素晴らしい教師に出会い、自分もそのような教師になりたいと思った、という動機や理由である。素晴らしさの中身としては、①教科指導の巧みさと、②人柄や人間性の面とに大別される。

例えば、①教科指導の巧みさの例としては、

- ・中1の時の英語の先生がとてもわかりやすく楽しい授業をしてくださり、私もその先生のように教えたいと思ったのが教職履修の動機である。
- ・苦手になりかけていた英語を、担当教師が実にわかりやすく根気よく教えてくれた。またモチベーションを上げるのも上手であった。そんな教師になりたくて教職を目指している。
- ・教職に興味を持ち始めたのは高校の美術の先生がきっかけで、好きな作品に直接触れ、生徒とも共感しながら芸術を学ぶ、といった授業をされ、受ける雰囲気がとても良かった。
- ・私の小学校の先生は、栄養士の資格を持ってはいなかったけれど、とても栄養に詳しい先生で、給食の食べ残しをなくすように残ったご飯でおにぎりを作ったり、クラスでゲームをしながら楽しく「食」について話し合う時間を設けたり、といった工夫をしてクラス全体で給食に対する意識を高め、私自身も好き嫌いを克服できたので、その先生のように子どもが楽しみながら学ぶということを大切にしたいと思います。
- ・中学2年の英語の授業をELTに教わったが、授業がとても楽しく、クラスメートにも人気があった。私も英語の教師になって、このELTのように生徒と一緒に作り上げていく、そんな授業がしたいと思ったのが教職履修のきっかけである。

以上のように、授業を「わかりやすく」「楽しく」「根気よく」教わったことや、「自分たち生徒と一緒に『授業を作り上げていく』教師との出会い」が、教職課程履修の動機や理由になっている、と言える。

次に、②教師の人柄や人間性の面から受けた影響としては、

- ・中3の時の担任が、心から信頼できる先生で、教師という職業の素晴らしさを知った。
- ・中学時代にいじめにあって辛い学校生活を送っていた時に、自分の担任が親身になって面倒を見てくれたり、相談やアドバイスをしてくれた。私もこういう教師になりたいと思い、大学に入学したら教員免許を取ろうと思っていた。
- ・中学校の時に素敵な教師との出会いがあったので、教職に興味を持つようになった。

以上のように、「親身の面倒」や「心からのアドバイス」をもらったこと、「人柄が信頼」できた

り「素敵な人間性」を備えた教師との出会いが、教職課程履修のきっかけとなった、と言える。

逆に、反面教師として、「えこひいきをする教師に出会い、こんな教師だけはいやだと反骨精神が首をもたげ、私は今教師を目指している」と言う学生や、奇特的な意見として、「教育実習へ行くことが私の夢である。中3の時の教育実習生が私にそんな夢を与えてくれた。それほどその実習生とは多くのことを語り合った」と、教育実習生との素晴らしい出会いが教職課程履修のきっかけとなった、と言う学生もいた。

(2) 父母など家族からの影響やアドバイス

2番目に多かったのは、父母や家族など身近なところに教職に就いていた人や就いている人がいて、これらの人たちから影響を受けたりアドバイスをもらって教職課程を履修している学生たちのケースである。すなわち典型的な意見としては、以下のようである。

- ・父は中学校、母は小学校の教師をしている。仕事は多忙で大変なこともあるが、毎日が充実していてやりがいがある、と言う両親を見て育ったから。
- ・「教員の仕事は毎日が発見に満ちており、常に新鮮な気持ちでいられる」と教師である父が口ぐせのように言っていた。多くの生徒と共に学んだり、共に悩んだり、共に笑ったり、そんなふうにかかわり合い、生徒たちの成長を近くで見守ることができる教職という仕事に就きたいと思った。
- ・親が公立高校の教師であり、収入が安定している公務員の道を勧められたから。
- ・父親が現在も私立女子高校で教鞭を取っており、教職の何たるかを私に教えてくれた。生徒指導の辛さや学校行事での教員の仕事の多さといった苦しい部分、逆に教員としての楽しい部分を聞いて育った。毎日疲れて帰ってくるのに、「やりがいのある仕事である」と言っている。
- ・祖父が高校の教員や校長をしていたし、両親も教員免許を取得、母は現役の英語講師という教育一家であり、その影響が大である。
- ・父親が中学校の教師であり、そうした父の姿は幼い私には格好よく見えた。
- ・親に教職履修を強く勧められたことと、中・高校の先生方がどのような過程を経て教員免許を取得してきたかを知りたいと思ったから。

以上のように、身近にいる両親や家族のだれかが教師をしていて、「やりがいのある仕事」であると言ったり、張り切っている姿が自分の将来のモデルになって、それが教職課程履修の大きな理由や動機となっている。加えて、子どもの自分から見て教師をしている父親が「格好良く見えた」り、「収入が安定している」職業であれば、魅力的に映ることも首肯されよう。

しかし一方では、「教師になりたかったけれどもなれなかった父親の強い勧め」や、「教師である父と母の強い勧めでしぶしぶ教員免許の取得を目指している」といった、やや後ろ向きで消極的な姿勢で履修している学生も、一部いることを見落としてはなるまい。

(3) 専攻している学科目が好きだし、それを生かすことができる

3番目に、「現在自分が専攻している学科目が好きだし、それを生かすことができるから、中・高校生に教えたい」という動機や理由で、教職課程を履修している学生たちもいる。すなわち、

- ・専攻している英語が好きだから、多くの子供たちに英語の楽しさを教えたい。特に、外国の人たちとのコミュニケーションが楽しいと思ったのが教職課程履修の始まりである。
- ・私は、中・高校時代、どの教科よりも英語が好きだったし得意であったが、多くの中・高校生は英語が苦手であるとか嫌いであると言う。驚くことに中1の頃からもう苦手だったと言う。だからもっと多くの生徒に英語を学ぶ楽しさを知ってほしいし、英語が好きになってほしいと思い、教職課程を履修しようと思った。
- ・小学校の時から英会話教室に通っていて英語が好きになり、中・高校でも英語が好きで、将来はそれを生かして英語に関わる仕事、中でも教職を目指そうと思った。
- ・今まで培ってきた自分の英語力を生かせる職業に就きたいと思ったし、英語を学ぶことによって人生が豊かになるということ、教員になって生徒たちに伝えたい。
- ・自分が専攻してきた国語の教師になって、国語の楽しさを教えたい。古典を教えたいので高校の方がベターであるかもしれない。
- ・高校時代に頑張って勉強したら国語の成績が急に伸び、自分の得意科目になった。そこから高校の国語の教員になりたい、と思うようになった。
- ・中学生の時から美術の授業が一番好きだったし、美術の面白さや楽しさを生徒たちに伝えたいと思うようになった。
- ・もともと子どもが好きであることと、人に何かを教えて相手が理解してくれた時は嬉しいので、自分の好きな美術を教えたいと思った。
- ・社会科が好きなこと、特に高校時代に学習した地理がとても楽しかったことが教職履修の動機となっている。
- ・中学の時の社会科で太平洋戦争を学んだ時、「こんな過ちを二度と繰り返してはならない」と考えさせられた。歴史や地理など社会科にとっても興味があるし、自分の専攻分野を生かせるから。以上のように、現在自分が専攻している学科目が好きであるし、そうした経験を生かせるから中・高校生に教えたいという動機や理由で、教職課程を履修している学生たちのケースである。大学時代の専攻を自分の職業に直結させることは、想像以上に難しい現実があるということであろう。

(4) 資格や免許の取得願望

4番目に、大学に入学したので、大学で取得できる資格や免許を取得したいという願望を持つ学生もかなりの数に上る。すなわち、

- ・大学に入学したからには何か価値のある、そして一生涯形に残るものがほしかった。それが私の場合は教員免許状であった。
- ・教員免許は大学でしか取得することができない。それゆえ卒業後にあの時教職課程を履修しておけば良かったと後悔しないように、学生のうちに取得できる免許はできるだけ取得しておこうと思い、今履修している。
- ・大学在学中に何か資格や免許を取得したいと思った。私の場合それが教員免許であり、自分の中で目標を立てることで日々の授業や学習に、より集中して取り組むことができるのではないかと考えた。頑張ってやりきることで、社会へ出ていく際に自信になるのではないかと思う。

このように、大学入学を機に、大学でしか取得することができない教員免許状を取得したいという学生たちは多い。しかし中には、「せっかく大学に入ったのだから何か資格を取得したいという程度のとても安易な気持ちで履修を始めた。そのせいか1年次後期の『教師論』の単位を落としてしまった」という学生の反省の弁もあった。

(5) 将来の職業選択の1つとして

5番目に、将来の職業選択の1つとして、教職課程を履修し教員免許を取得しておこうと考えた学生たちもいる。すなわち、

- ・卒業後、故郷へ帰って教師になることも将来の選択肢の1つであるし、職業選択の幅を広げたいと思って履修している。
- ・将来のために教員免許は持っていて損はなく、中には就職活動に有利に働く場合もある、と聞くので。
- ・就職活動をする時に選択の幅を広げるため、栄養教諭の資格が取れる教職課程を履修しようと決めた。
- ・将来、教育という分野に何らかの形で携わってみたい、という漠然とした思いで履修している。
- ・大学卒業後の就職が心配で、取れる資格は取っておこうという安易な気持ちで履修している。
- ・私の将来の夢は、病院の管理栄養士になりチーム医療に貢献することなので、教職課程を取るつもりはなかったが、教員免許を持っていればより多くの就職先を考えることができると思ったから。

このように、将来どうなるかはだれにとっても不確実であるので、いくつかの職業選択の1つとして教職履修をしている学生たちのケースである。残念なのは、こうしたケースでは学習意欲のあまり高くない学生が多く見られることと、困難に直面すると容易に履修取り止めにつながる可能性が高いことである。

(6) 自分を成長させるため

6番目として、「自分を成長させるため」に教職課程を履修しているという学生たちのケースである。すなわち、

- ・教職の授業を受けることで、社会に出た時に役に立つことが学べると思った。同じ4年間大学に通学するなら、大学でできることを最大限活用しようと思い、この教職課程を履修している。
- ・皆と同じように大学に通い講義を聴いているだけでなく、何か自分の将来のために勉強してみたいと思い、1年遅れて2年生になってから教職課程の履修を始めた。
- ・私は、大学に入学したからには大学でできることに精一杯取り組みたいと思った。生まれつき飽きやすい性分の私は、何を行うにも長続きしなかった。そこで自分の性格を変えるいい機会だと思い、教職課程の履修を始めた。
- ・大学時代が最後の学修期間であり、中・高校時代あまり勉強してこなかったことを反省して、真面目に勉強したいと思ったが、本学ではCAP制のため24単位以上は取得できないことになっている。そこで正課の単位には含まれない教職課程を履修しようと思った。

- ・人にもものを教えるスペシャリストとしての教師になる過程を学ぶことで、管理栄養士としてあらゆる人に対して栄養について指導したり、アドバイスをする際、役に立つのではないかと考えた。
- ・教職を履修することで話す力や伝える力といった、自分に足りない力を身につけたいと思った。そして自信をもって人前で話すことができるようになりたい。

このように教職課程を履修することで、教師になる過程で必要な伝達力や説明能力を身に付けたり、中には自分の性格の変容を期待したり、何よりも自分を成長させるために教職課程の履修をしている学生たちのケースである。こうした場合、成長意欲をいつまで持続させることができるかがカギとなる。

(7) 教職への憧れ

- 7番目に、一部の学生たちには「教職への憧れ」が履修の動機や理由となっている。すなわち、
- ・子どものころから教師という職業に憧れを抱いていたことと、人に影響を与えられる職業の教職に興味があった。
 - ・父が高校教員、母が学童保育クラブ指導員をしている我が家では、教育の話題も多く、自然に教師という職業に興味を持ち、「教師になりたい」という憧れの気持ちが芽生えた。
 - ・教職はヒューマンで人間味のある職業であるという点に魅力を感じた。今まで出会った教師には人間味や愛情のある人が多かった。私も教師になって子どもたちと楽しく、有意義な一生を生きてみたいと思った。
 - ・私は昔から「学校」という空間が好きであった。学校は、友と競い合いながらお互いが成長していく素晴らしい場所だと思う。そんな場所で働きたい。
 - ・女性にとって「教師」という職業は、とても働きやすい職種であると思っているから。
 - ・生徒の立場ではわからない教職の魅力や苦勞がたくさん隠されていると思うので、教職を履修して教師という職業の奥深さを知りたい。

このように、教職に憧れを抱えていることが、教職課程履修の動機や理由になったという学生たちのケースである。ただ昔に比べると、世間の教師を見る目はかなり厳しくなっていることと、勤務条件もかなりハードになっていることを自覚する必要があるのではなかろうか。

以上、教職課程履修の動機や理由についていくつかのケースに分類して見てきたが、中には想定外の動機や理由を挙げた履修学生もいる。例えば、「大学へ通う理由として教員免許を取得するため、と親への説得に使ったので、今その約束を果たしている」といった学生、また、「バスケットボール部員であった私に顧問の先生が、実践女子大学では教員免許が取れるから、お前は絶対取った方がいい。教師という道も考えてみなさい、というアドバイスをもらって興味を持った」という学生もいた。このように本学のことをよく御存じの先生も世間にはおられるようで、有り難い話であるとしか言いようがない。

以上のケースから、学生たちは実に様々な動機や理由から教職課程を履修していることを、われわれ担当教員は認識しておく必要があろう。

3. 教職課程履修の効用

次に、学生たちは現在、ほとんどが大学2年生として教職科目の授業を履修中であるが、日頃からいろいろと覚えることもあるであろう。これらの感想のうち、教職科目の履修が自分にとって役に立っていたり良かったと思うこと、あるいは何らかの形で自分にとってプラスの効果であると感じていることは何であろうか。それらをピックアップしてみると以下ようになる。

- ・今まで教職課程の授業を受けてきて、とてもためになることがたくさんあった。教職を履修すると授業も多くなって大変であるが、今までやってきて忍耐力や根性もついてきた。ただ教員免許を取得するためだけでなく、人間的にも成長させてくれる場となっている。
- ・教職課程の授業を受けてきて学んだことは多く、視野が広がった。初めて教師の視点で授業を見ることができ、こんなにも教師の努力や工夫があって毎日の授業が行われているかと思うと、驚きで一杯である。
- ・教職科目の内容はどれも興味のあるものであるし、教職科目を学ぶことで自分自身の人間性の形成に大いに有効であり、有意義な時間であると思っている。
- ・教職科目の内容そのものが、自分にとってあるいは自分の将来を考える上で、非常に参考になっている。
- ・教職課程の履修が自分自身を成長させる糧となっている。現代の教育に目を向けることができるとし、社会へ出ていくための格好の事前準備ともなっている。
- ・教職課程の学習は私にとって思考の幅を広めるものであり、新たな自分と向き合う機会を築く貴重な学びとなっている。
- ・相手に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いか、を考える機会となっている。また実習等の事前学習で人前に立つ機会も多くなるが、これらは今しか学べないことであると思う。
- ・教職課程で免許取得を目指して励んだ時間と得た知識は、きっとどの職業にも生きてくると思うので、大きな自信や糧となると考える。必ずや自分の将来の大きな財産となるであろう。
- ・教職課程のどの先生からも教員であることの誇りが感じられ、教師として生きている人たちの素晴らしさに、こんな人間に私もなることができたら、と目標となっている。
- ・教職課程を履修すると忙しくて大変であるが、一生懸命取り組むことは自分自身の成長につながると思う。実際、教職課程で勉強する内容はとても興味深く、履修して良かったと思っている。もう一つは、同じ教職課程を履修する友人たちの存在である。2年生になって彼女たちと一緒に過ごすことが多くなり、大学生活が楽しくなった。だらけがちな大学生活を有意義に過ごすことができている。
- ・教職について相談できる友達ができただけが私には良かったことである。

このように、教職科目の内容そのものが興味深いし、わかりやすく伝えるなどの指導技術の向上にも有効であると思っている。また自分自身の成長に役立つし、将来の人生や生活にも有益であると思っている。加えてわれわれ教職課程の教員をほめてくれている学生もいて、幾分面映ゆいところもあるが、同行の友人ができたことは替え難いプラス効果であると言えるのではなかろうか。

4. 教職課程履修の障壁

一方、教職課程を履修していて、学生たちが大変だと思ったり障壁だと感じていることは何であろうか。

(1) 教職課程を履修すると多忙で精神的な余裕がなくなる

まずは、教職課程を履修していることで他の学生たちに比べて非常に多忙となり、精神的な余裕がなくなって、大学生活に支障が出がちになることである。すなわち、

- ・教職課程を履修していて大変な点は、想像以上に精神的負担が大きく、心の余裕がなくなってしまふことである。授業の時間割を組むのが大変であるし、履修スケジュールに毎学期頭を悩ましている。
- ・教職課程を履修していると、授業コマ数が多く空き時間が少ない。休日もほとんどなく、教職を履修していない学生がうらやましくなることがある。
- ・他のクラスメートより授業時間数が多く休みが少ない。テスト数やレポート数も多く、またこれらが重なるため大変である。
- ・教職履修は何かとリスクが大きいと思えて困っている。まず教職の履修科目が多く、生活に余裕がなくなることで自己嫌悪に陥る。教員免許を取っても教員になれる保証はなく、そう考えるとそれを目指すのもリスクに思えてしまう。卒業後、定職に就かず教員採用試験を受け続けることもリスクであり、教員になれないと大学時代の勉強も無駄になってしまう、とさえ思える。
- ・家庭の事情でアルバイトをしないといけないが、1～5時限まで授業が詰まっている日もあってそれもできず、教材費も重くのしかかっている。
- ・通学に2時間弱かかり、家庭の事情でアルバイトも週に平均5日ほどやっているが、教職取り止めによって生じるメリットは大きいと思うので、履修の継続を現在迷っているところである。
- ・管理栄養士専攻なので国家試験の勉強と教員採用試験の勉強、更には就職活動が待ち受けており、将来のことを考えると不安で一杯である。
- ・管理栄養士の国家試験に向けての勉強はもちろんのこと、給食実習や臨床実習もあるので、うまくやらないと勉強が追いつかなくなってしまう。

このように、教職履修によって時間的に過密なスケジュールになること、精神的負担が大きいこと、またアルバイトにも何かと制約が生じるため経済的に苦勞が多いこと、といった学生たちの悲鳴にも似た声が伝わってくる。

(2) 受講科目が重なるため他の興味のある授業や資格が取れない

2番目に、時間割のバッティングで興味のある授業や他の資格が取れない、といった学生たちの悩みも大きい。

- ・自分の受けたい授業が教職課程の授業とバッティングしていて、受講することができない。
- ・教員免許のほか、認定心理士や社会調査士の資格も取得しようと思っているので、授業数や課

題も多く大変である。

- ・人社の学生であるが、日本語教員と社会調査士の資格取得も目指しており、両立がきわめて難しい。
- ・教育実習の時期と就職活動の時期が重なることが今から心配である。
- ・私のように教師になるか、企業に勤めるかで迷っている学生には、教育実習と就職活動の面接の時期が重なってしまうというのが悩みの種である。

このように、教職履修によって他の興味のある授業や資格が取れなくなったり、教育実習と就職活動がバッティングすることが悩みの種である、といった指摘である。興味のある授業が多くあることは好ましいことではあるが、そこにはやはり優先順位を決める必要があるし、資格や免許をいくつも取得しようと思うことは、ある意味で欲張り過ぎであると言えなくもない。1つの資格や免許を取ったら、それを就職にまで直結させるようであってほしいものである。

(3) 自分に教職の適性があるのか不明で不安である

3番目に、自分に教職の適性があるのかどうか不明で、この点が不安である、といった指摘である。すなわち、

- ・私は自分が教師に向いているのか、あるいは教壇に立ってきちんと授業ができるのか、はっきりしないので非常に不安に思っている。
- ・自分は教師に向いていない性格ということもあり、自信がない。社会に出ずに教師になるということに恐怖心すらある。教師には豊かな人間性や社会性も求められるので。
- ・私は人前で話をしたり説明することが苦手であるので、目前に迫った教職の模擬授業が障壁になっている。
- ・私は、人見知りをするため、人の前に立って話をするのが苦手です。教育実習校で上手に振る舞ったり、生徒たちと短期間で馴染むことができるのか心配です。
- ・私は、極度の上がり症と早口であることが教職履修を継続する上で障壁となっている。
- ・英語の教員免許を取得したいと思っているが、スピーキングやライティングの力が不足していると思うので、身に付けないといけないと思うと気が重い。
- ・自分では英語の発音に気を付けて勉強をしてきたつもりであるが、ネイティブに近い発音になるのは難しい気もする。こんな発音で教えてもいいのだろうかと不安である。
- ・私にとっての障壁は、子どもたちとどのようにして向き合っていけばいいのか、ということである。長年、教職に就いている先生方でもうまくいかないことがあるというのに、若輩の私が教職に就いたら子どもたちとうまくやっていけるのかと考えると不安である。
- ・教職課程を履修していて学校現場のことを学ぶと、自分にこんなにも厳しい教職の仕事ができるのかと不安に思ってしまう。
- ・今、教育界では様々な問題があり、教師になるのが怖い思いがする。モンスターペアレントから始まり、いじめや教師の鬱問題など不安要因がたくさんある。一番怖いのは、生徒に受け入れてもらえなかった場合や生徒から教師へのいじめがあることである。
- ・教師による不祥事を見聞きしていると、「自分は大丈夫だろうか」と思ってしまう。もちろん悪

いことをする気は毛頭ないが、何か予期しないことが起こった時に子供たちを助けられるのか、子どもたちや親御さんに信頼されるような教師になれるのかがとても心配である。

- ・今、学習塾で講師のアルバイトをしているが、10人足らずのクラスでも苦戦しているというのに、この3～4倍の数の生徒を相手にするととなると、とても自信が持てない。

このように、履修学生たちの多くが教職への適性や能力の不足を非常に心配している。未知の世界や職業へ向かう学生たちの偽らざる心境であると言えまいか。

(4) 教員免許の取得条件が厳しすぎる

4番目に、教員免許の取得条件が現行では厳しすぎるのではないかと、といった指摘である。すなわち、

- ・正直なところ、私には教員免許を取得することがすごく困難に思える。今まで頑張ってきた履修仲間が一人二人と止めていってしまうことが私にはショックである。昔はさほど大変ではなかったと聞いているが…。
- ・私にとって障壁と覚えることは、教員免許を取得するのに必要な単位数が想像以上に多いことと、1年生の時に一緒に教職課程を履修していた友人が、履修を取り止めてしまったことである。
- ・免許取得までの道が楽でないことは十分に分かっている。すでに1年生の後期と2年生の前期に教職科目の定期試験を受けてきたからだが、その勉強だけでも辛くて、この先本当に履修を続けていけるか心配である。
- ・今、国で進められている修士レベル化の教員養成改革が、私には障壁となっている。
- ・学科および専攻のどの先生も教職課程の履修をあまり強く勧めていない感じがする。余裕のある学生は履修するように、という程度である。

以上見てきたように、教職課程履修の障壁として学生たちが感じていることは、多忙感が大きいこと、履修科目や資格取得の点で選択の幅が狭められること、自分に教職の適性があるのかどうか不明で不安であること、教員免許の取得条件が厳しすぎて履修仲間が履修を取り止めてしまい、精神的なプレッシャーとなっていること、などであるとまとめられる。

5. 教員免許取得後のデザイン

最後に、調査対象である2年生の学生たちが教職課程の履修を継続したと仮定して、大学卒業時に首尾よく教員免許を取得した場合、それをどのように活用しようと考えているのであろうか。換言すれば、教職への就職をどの程度真剣に考えているのであろうか。

(1) 教員採用試験を受験し、積極的に教職を目指す

一方には、教員採用試験を当然のように受験し、積極的に教職を目指そうとする理想的な学生グループがいる。すなわち、

- ・教員免許が取れたら、もちろん教師になろうと思っている。今は教師になる以外に自分の将来の夢をうまく描けない。

- ・今の私にできることは今のうちにこなし、2年後、未来を担う教員になりたい。なぜなら教職は女性にとってとても働きやすい職場であると思うので、ぜひ教職を目指したい。
- ・私の出身である宮城県の国語教師として働くこと、欲を言えば母校でお世話になった恩師と一緒に働くことが私の夢である。従って1回の教員採用試験で合格が無理であっても、次の年、その次の年も採用試験を受け続けるつもりである。
- ・私は教員免許を取得できたら、中学校か高校の英語教師を目指したい。そして生徒たちに英語が好きになってもらえるような教師になりたい。英語は自分の世界を大きく広げてくれることを生徒たちに伝えたい。
- ・私は、山形県の中学校の英語教育の向上に努めたいと思っている。故郷の母校で英語を教えることが私の夢であり、山形県の中学校の英語能力を全国1位にすることが私の大きな夢である。
- ・晴れて教員免許が取れたら、母校の私立高校の英語教師になりたい。それがダメなら非常勤講師でもよいから母校で働きたいと思っている。
- ・教員免許を取得したら、教員採用試験を受けて教師になり、実際に教壇に立ちたいと思っている。美術科は他の教科に比べて採用人数が少なく、1回で合格することは難しいと思うが、1回で合格しなくても講師などをしつつ諦めないで正規の教員を目指したい。
- ・一番考えることは、地元の学校の教師となり、今まで学んできた社会科について教えたり、生徒たちと日常的にも気軽に話し合えるような教師を目指したい。
- ・私は、栄養教諭の免許を取ったら小学校に勤めたい。子どもたちの給食を作りつつ栄養教育を施すことで、幼いころから子どもたちに「食」の楽しさ・大切さ・喜びを知ってもらい、また「食」で笑顔を増やしたいと考えている。

以上のように、教職志望の意欲の強い学生たちの姿は、われわれ担当教員から見ても頼もしい限りであるし、全面的に応援したく思う。とりわけ地元志向や母校への思い入れが強い学生たちからは、理想的な教育の体現者のようなものが感じられ、応援にも一層力が入るというものである。

(2) 教員免許を、いざという時の備えとしたい

他方で、せっかく取得した教員免許を将来のワンステップにしたり、万が一の備えにしたい程度にしか考えていない学生たちも多くいる。すなわち、

- ・一般企業への就職がうまくいかなかったり、将来何かあった時などのために、教員免許をいざという時の備えとしたい。
- ・教員免許取得後すぐに教職に就くのではなく、2、3年の間、一般企業に勤めてから教員を目指すことも1つの選択肢であると思っている。いったん社会に出てから教員になった方が、物事を広い視野で捉えることができるであろうし、実際に自分が授業をする時に話のバリエーションも増えると思う。
- ・栄養教諭になりたいが、出身県の栄養教諭の採用が少ないので、管理栄養士としてのキャリアを積んでから、栄養教諭になろうと考えている。
- ・英語を教えられるなら中学・高校の教師でなくてもいいと思っている。今は小学5年生から英語の授業があるし、給料は良くないかもしれないが、それらの講師や補佐、あるいはECCの塾

などのような場で教えるのもいいと思っている。

- ・大学では中・高校の教員免許を取得し、大学院に進んで主に知的障害について学修する中で特別支援教育の理解を深め、そちらの免許も取得したい。特別支援学校の教員としての採用を目指して自身の生涯設計を立て、何事も学び続ける教員でありたいと思う。将来的には特別支援教育のコーディネーターを目指している。

以上のように、教員免許の取得直後ではなく、いったん民間企業で働くなど社会に出てキャリアを積んだ後、教職を目指したいと思っている学生たちのケースである。確かに社会に出ていろいろな経験を積んでから教職を目指すことも一理あるし、視野も広がり生徒への話のバリエーションも豊かになるかもしれない。しかし反面、教職への道からの当面の逃げ口上のように聞こえなくもない。鉄は熱いうちに打てと言われるように、教員免許を取得した時こそが、教職を目指す最善のタイミングではなからうか。

6. おわりに

教職課程を履修している学生たちの「教職」に対する意識や心理、本音や思いなどを可能な限り探りたいと思い取り組んできたが、最後にそのまとめと感想、課題等を記して結びとしたい。

最初に、学生たちが教職課程を履修した動機や理由を探ったところ、実に様々であることがわかった。すなわち、自分が今までに教わった恩師の教科指導の巧みさや、その人間性の素晴らしさに感銘を受けたこと、身近にいる家族が教職に就いていたり現在も教職に就いていて、その姿やアドバイスが参考となったというケース。また現在自分が専攻している学科目が好きであるし、それを何らかの形で生かしたいから中・高校生に教えたいと思ったり、大学でしか取得できない教員免許だから学生時代に取得したい、そして将来の職業選択の1つとしたいと思う学生、あるいは教職履修を継続することで自分を成長させたい、更には子どものころからの教職願望で履修をしている、等々学生たちは実に様々な思いや願いを抱いて履修していた。

次に、現在教職課程を履修していてプラスの効果と感じている点としては、教職科目の内容そのものが興味深し、話し方や伝え方、教え方など自分の指導技術の向上に有効であると思っている。また現在の自分を成長させることに役立っているし、将来の人生や生活にも有益であると思っている。更に、教職課程履修を通して共に学んだり相談し合える同行の友人ができたことも、大きなプラス効果であると感得していた。

逆に、教職を履修していて大変であったり障壁と感じている点としては、予想はしていたものの履修科目や単位数が多すぎがために大学生活が非常に多忙になったり、他の興味のある授業や資格取得を選択することが難しくなってしまうこと、自分に教職の適性があるのかどうか不明で不安に思っていること、履修仲間が履修取り止めをすることで精神的なプレッシャーを感じてしまう、といったことである。

最後に、2年先のことになるが、教員免許取得後どの程度真剣に教職への道を考えているかという点では、4年次に現役で積極的に教員採用試験を受験して教職を目指そうとしている理想的な学生たちと、いったんは民間企業に就職するなどして教員免許はいざという時の備えとしたいと考え

ている学生たちと二分された。想定された結果ではあるが、可能な限り多くの学生たちが現役で教職への道を目指してもらいたいと願っている。

こうした結果を見て感じることは、従来からの教職課程履修学生たちと何ら変わりがないと思う半面、国で定められた修得単位数の増加や学内の履修要件のアップなどで免許取得が年々厳しくなっており、学生たちにとって免許取得がかなりの負担になっているということである。そのため、何とか教員免許の取得にまで到達できる学生の割合は、履修当初の半分ないしはそれ以下になってしまうというのが現実であって、きわめて残念なことである。もう1つは、教員免許を取得する学生たちには、是非とも積極的に教職を目指してほしいと願っているにもかかわらず、相変わらず教員免許ほしさだけの学生がかなりの割合で存在するということである。こうなる原因は、教員採用試験の合格の難しさと教職の厳しい勤務実態が、履修学生たちにも感得されるからであろう。

第3に、近年では履修カルテの活用や教職実践演習の導入など、実にきめ細かな教職指導が内外から求められるようになって、大学が中・高校のように“学校化”してきており、同様に学生も必然的に“生徒化”してきてしまっている。こうした大学生らしからぬ手取り足取りのきめ細かな指導を受けるようになって、かつては普通に見られた自分の将来に強い信念を持った個性的なタイプの学生が少なくなり、今後ますます小粒で指示待ち的な教員しか養成されなくなりそうな気がして残念でならない。

最後に、本稿では文章化された学生のレポートを資料としたので、アンケート形式の統計的な処理を行ってはいない。また一学年のみの限定的な学生を対象としているだけなので、多学年の学生を対象としたり、経年的に意識調査を継続すれば、より詳細で明確な結果が得られるようになるであろう。更には他大学の教職履修学生と比較すれば、より本学の学生の特徴が鮮明になると思われる。これらの点については十分自覚しているものの、今回は手つかずのままである。こうした課題の探究については他日を期すこととしたい。

(2013年11月7日)